

【ナムナム】

南無/numb

マヒした心を解きほぐす。坊主のつぶやき。

まぶたの者は

暴力におびえる

まぶたの生きものにとつて

生命は愛しい

己が身にひきくらべて

殺してはならぬ

殺さずめてはならぬ

釈尊の言葉

表紙のことば

このことばを聞いたことはある？

はじめて聞くなあ。誰の言葉なの？

お釈迦様のことばなんだ。『ダンマパダ』という本にも載っているからまた見てみるといいよ。

ふーん。ずっと昔の人の言葉でしょ。時代遅れじゃない？

そんなことはない。今を生きる人にとって、とても大事なことばだよ。もう一度見てごらん。

・・・うーん。わかったようなわからないような。「己が身にひきくらべて」とか「殺さしめてはならぬ」とか、なんか難しいな。

そうだね。良いところをピックアップしてくれてありがとう。とても大事なところだよ。



表紙：書
高岡市内島教願寺
岡西 法英 師

「己が身にひきくらべて」というのは「暴力によって殺される側に自分の身を置いてみよう」ということなんだ。

相手の気持ちも考えようってことだね。

それではちょっと弱いかな。殺される生命の恐怖や苦しみを、自分自身の恐怖や苦しみとして感じ、受け止める。そう受け止めたならば殺す側に立つことはあり得ない。

・・・うん。

続けるよ。そして、殺すという行為は、殺されるのと同じくらいに命を投げ出す行為だと思っ。だから「殺さしめてはならぬ」。自分ではない誰かが人を殺す事は、自らが殺す事と同様の痛みとして受け止める。

聞く前よりわからなくなっちゃったな。でも熱い想いは伝わってきた。

・・・お釈迦様のことばは深いよね・・・興味を持ってくれてありがとうね。

共に生きる世界を目指して

〈ロシア・ウクライナ問題に寄せて〉

2022年2月、ロシア軍によるウクライナへの侵攻が開始され、連日の報道を通して現地の方々の恐怖と悲しみ、絶望が映し出されています。

国家の正義の名の元に、兵士たちは互いに傷つけ合い、今この瞬間にも多くの命が失われています。また、民間人や子供たち、罪なき人々が戦禍の波にのみこまれ、家を失い傷つけられていく姿に、深い悲しみを覚えずにはおれません。

仏教の開祖である釈尊は「すべての者は暴力におびえる」「殺してはならぬ、殺さしめてはならぬ」とおっしゃいました。全ての暴力的行為を否定し、私の行為だけでなく、他者の行為をも留まらせ、私たちが命の奪い合いを容認、黙認することも誠めています。

私たち、高岡教区寺族青年会（鸞翔会）は、仏教徒として、この度のロシア軍によるウクライナへの軍事侵攻を強く非難するとともに、一刻も早い対話による平和的解決を求めます。

これまでも世界各地で様々な軍事的衝突や紛争が繰り返されてきました。しかしながら私たちはそれらの問題に目を向けてきたと言えるでしょうか？人が、子どもがいのちを奪われている状況に無関心であることは、結果的にそれらを黙認しているに過ぎなかったということを痛切に感じています。

私たちの社会は第一次世界大戦と第二次世界大戦という悲惨な経験の反省から、誰もが戦争によって殺められることのない

平和な世界を求めてきました。しかしながらこの世界は、凄惨な先の大戦を通して尚、依然として核による抑止力や軍事的パワーバランスに頼る「力の均衡」の中にあるのが現実です。77年前の戦争がそうであったように、人間の欲望と自己利益の中で力が暴走するとき、その平和は脆くも崩れ去っていくのです。

阿弥陀如来は、私たちが傷つけあうことなく、ともに互いの命の尊厳を認め合うまことの平和を構築することを願われています。武力や暴力と同列に認められるいかなる正義も、本当の平和もないのです。

ロシア・ウクライナの問題が報道されてから既に3か月以上が経ちました。現状は改善の兆しが見えることなく、悪化の1途をたどっています。一方で時間の経過とともに関心が失われ、どこか遠い国の出来事として、考えることを放棄している私の姿があります。

遠く離れた異国の地で悲しみに暮れる人々。その人たちと私たちは本当に無関係な存在なのでしょうか。仏教の「全ての存在は互いに関係し支え合う中で存在している」との真理の元、これらの問題から目を背けることなく、共に手を取り合い、真なる平和を実現するために私達一人ひとりが努力をしていかなければなりません。

この世界の暗闇を打ち破っていく力と可能性を持っているのは、教えをいただく私たち自身の歩みなのです。敵味方という枠組みを超え、恐怖と悲しみと絶望からの解放をめざして共に歩んでまいりましょう。

「心に浮かんで消えていくたわいなこと」をもっともらしく語り合おう。このコーナー。話し手は麻生さんの。そして今回のゲストは、県内の病院で看護師として働いておられる松隈祐子さんです。

中学校の同級生でもあるお二人に、普段は話すことのない看護取りの現場のことや、コロナ禍で感じていたことについて語り合っていました。

「命」の現場

麻生 昨年、青年僧侶による全国規模の研修会で「看取り」をテーマに学びを深めました。そういった流れの中で、実際にその現場で働いている方の話を聞いてみたいと思いい声をかけさせていただきました。ようこそ。

松隈 よろしくお願ひします。いつもと違う感じでやりづらいね(笑)

麻生 早速やけど、いまちやどこに勤めとるんやっ たっけ？

松隈 今は県内の病院の集中治療部。いわゆるICUでとところで、大きな手術をされた方の術後を診ています。一般病棟では診れない人を数日間、落ち着くまで。

麻生 ということは亡くなられる方も？

松隈 もちろんその中には看取りもあるし、急変される方も、良くなつていかれる方もおられる。

麻生 そういった場で患者さんと会話することは？

松隈 ある時もあるし、話せない状況になることもある。意識なく入ってこられてそのままということも。人工呼吸器つけておられる間はジュエスチャーや

筆談でのやりとりもあるし。痛みの話もあれば、奥さんに会いたいとか家に帰りたい、電話してくれ、寂しいとか。でも現状は点滴とかもいっばいつながつているしどうしようもないな。

麻生 やりようがないね。患者や家族の思いだけではどうしようもないこともあるから。

松隈 そうだね。家族が、終末期だから家で見たいつて言つても病院側としては最大限治療してあげたいという気持ちもあるし。ただ医療的に見て先が見えないことが明らかな時は、治療を中断して残りの時間を家族と過ごさせてあげたいという気持ちは大いにある。

麻生 命が短くなつたとしても家族との時間を取るということやね。

松隈 そう。やっぱり選択するのは患者さんだから、意識があるうちは「どうしたい？」と聞くこともあつて、家族も望むのであればフルサポートしてあげたいと思う。だけど現状、在宅看護のシステムがあるけど、家族が在宅で診る事に不安や抵抗があつたり、病院の方が安心して言う人も多いから、あまり活用されていないかもしれない。だけど、コロナ禍で面会制限がかけられたから、在宅看護を考へる家族は増えたんじゃないかなあと思うよね。

麻生 これから在宅看護が増えていくつていう話がよく聞かぬ。

松隈 団塊の世代のこともあつて、平均寿命も長くなつて、超高齢社会で入院患者も溢れかえるかもね。併せて子供が少なくなつていくから医療従事者も少なくなつてくる。最近県内某病院の在宅看護の新聞記事も目にしたから、富山県内でも増えていくと思う。

麻生 海外の実習生が増えている話も聞かぬし、ビハラー本願寺(※)やつたと思うけど、実際にベトナム人実習生が頑張つていてという記事も見つたことあるわ。

※ビハラー本願寺・・・「仏教徒が、仏教・医療・福祉のチームワークによって、支援を求めている人々を孤独のなかに置き去りにしないように、その心の不安に共感し、少しでもその苦悩を和らげようとする活動」という「ビハラー活動の理念」のもと、本願寺が運営する特別養護老人ホーム

麻生 看護師という仕事を選んだのはどうして？

松隈 私が10歳の時にお父さんが肺ガンで亡くなつて、その時に看護師になりたいと思つたかな。

麻生 そんな話聞いたことなかつたな。

松隈 看護師か美容師か建築士になるにはどうしたら良いか、学研の赤ペン先生に聞いてみたみたいで(笑)。最近片付けしとつたらその紙が出てきた。

麻生 赤ペン先生への信頼感すごいね(笑)。お父さんが亡くなられた時にそう思つたということ、その時の記憶は鮮明に残つているのかな？

松隈 そうやね。割と鮮明に覚えていて、お父さんが入院していた時のことも覚えていて「こういう時にはこうしてあげたい」とか患者さんの思いを大事にしたいと思つるのはお父さんのことがあつたからだと思つた。

コロナ禍の「命」

麻生 コロナということに関してはどうやろう？僕ら僧侶の大きな変化としては葬儀・法事の縮小化が加速したつていうことがあつたんやけど、医療において大きく変わつていきそうなのはあつて？

松隈 今言つていた在宅ということもそうだし、面会の制限があるのが今後どうなつていくのかなあと思つたよ。

麻生 最後に家族に会えなかったという悲しみ苦しみの話をたくさん聞いたなあ。いつ亡くなってしまうかわからない、あの病院のあの場所に居るのがわかっていくのに会えない寂しさ。生かしていく命と終えていく命、どちらも大事なひとつのいのち。なんやけどね。

松隈 亡くなられた表情さえ見られないということもあつたと思うよね。会えない話せない触れられない。

麻生 そういった後悔の思いはずっと残っていくんじゃないかな。昔は病室に親族が大勢集まつて見送っていたという話も聞くけど、本当に寂しいし、もどかしいね。

松隈 そうやね。ある種の災害のようにも感じる。生まれてから死ぬまですっかりサポートできる社会であつてほしいけど、難しい問題がたくさんある。

看取りの現場

麻生 お坊さんにも医療関係の方と連携して看取りを行なつておられる方がいて、終末期の方と接する緊張感や難しさをお聞きしたことがある。

松隈 その時に接したことが本当に正解だったのか、日々考えるよ。声のかけ方とか。そういう点ではお坊さんも難しいだろうね。

麻生 悲しみに暮れているご家族に対して、その感情を逆なでするような言葉や態度をとっているかもしれない。

松隈 人間だからミスはするけどね。人それぞれみんな違うから、この家族なら大丈夫なことがこの時はダメつていうパターンもあるし。初対面なのか長い付き合いなのか、信頼関係でも違ってくる。

麻生 確かに。相手を知っているからこそかけられる言葉がある。

松隈 短時間の中で見ていくのは難しいけど、些細な会話であつてもその人から漏れるものを取りこぼ

さないようにアンテナ伸ばしながら声かけて、聞くしかないかな。看護師と僧侶で仕事は違うけどベースにあるものは一緒だよ。

麻生 人と人。マニュアルみたいなものはないから、時には失敗しながら学んでいかんね。

松隈 愛想の良いいいちゃん家族のサポートも手厚いけど、薄情なことをしてきたであろう方は寂しそう。だけどそこは平等に見送つてあげたいと思う。やっぱり人間やからね、温もりが欲しいんだろ。口が悪い患者さんやつたなあとか心の中で思つたとしても、綺麗に見送つてあげたいと思ふよ。それに愛しくなってくる。憎まれ口も聞けなくなつたなあとか。その人にとつての表現の仕方がそれしかなかったのかもしれない。

麻生 ただ、人の死に良いも悪いもなくて、同じ尊い命やと思う。こちら側が命の線引きをするということとは自分たちも選別されるということやからね。

「いのち」のつながり

麻生 看取りのことをもう少し聞いてみたいんやけど。人が亡くなるる時に、意識はなくても耳は聞こえているつて言うよね。

松隈 そうやね。亡くなる人は脈が落ちてくるけど、家族に声かけしてもらおうと脈が一時的に戻つたりということが実際にあつて、周りからの声は届いているんだなあと思う。涙を流す方もおられるし。

麻生 それはすごいことやね。感謝の思いとか、まだ生きたいという思いが現れるんやろうか。

松隈 そうそう。私たちだけで看取することもあるし、好きな音楽を流したりという事もあるけど、家族の話し方、方言とか声質は真似できないから、家族がそばにいれば良いなあと思う。

麻生 「ここに居るよ」つていうことだけでも感じられたら良いよね。同じ空気感というか、空間の響きみたいなものが共有できれば素敵やなあ。

松隈 私は死んだらそれで終わりとは思っていないく、支えてくれていると思つている。お父さんだけじゃなくて、おじいちゃんやおばあちゃんにも。お父さんは早く亡くなつてしまつたけど今の仕事を頑張つていけているのもお父さんのおかげだと感じているし。姉妹全員看護師なのもその影響かなと思う。たまたまかもしれないけど(笑)。

松隈 祐子

Yuko Matsukuma

県内某病院に看護師として勤務。日々のいのちの現場で患者さんと向き合っている。

麻生 裕善

Hiroyoshi Asou

高岡市常国専龍寺若院。鸞翔会フットサルサークル、雅楽サークル代表。愛読書は『ラーメンwalker』。

Guest



Interviewer



<いのち>のリレー

私たち鸞翔会は2025年に結成50周年を迎えます。これまで、インドシナ難民救援活動、平和活動、死刑制度問題、ハンセン病問題、災害救援活動など、時局の影響や問題意識から様々な歩みを重ねてきました。一昨年の1月に鸞翔会初代会長の飛鳥寛恵さんが亡くなりました。僧侶の社会性を自らに問いかけられた寛恵さんの姿勢や精神は、いまでも鸞翔会の礎となっています。

今号のコラムは寛恵さんの息子さんである高岡市中田 善興寺住職 飛鳥寛静さんが善興寺会報に寄稿された文章をナムナムに再掲いたします。



飛鳥 寛静

Kanjo Asuka

飛鳥山善興寺住職。鸞翔会第17代会長。非戦・平和活動に取り組む。毎年秋には、音楽イベント「天人とともに」を開催。ヤギと共に暮らす。

前住職の往生と 新時代の到来

令和二年一月二十一日、前住職が浄土に生まれていきました。

昨春に喉頭ガンの定期検診で新たに肝臓ガンが見つかり、治療を受けましたが、薬の副作用で強い倦怠感が続き、本人の希望で抗がん剤治療をやめて、自然のままに生きたいという選択をしました。副作用もなくなり、それなりに元気な日々を過ごしておりましたが、年末、急に腹痛を訴え、診てもらったところ、肝機能不全による静脈瘤ができていました。肝臓ガンは進行していたのです。

そのまま入院しましたが、病状は日に日に悪化し、治療のすべなく、この世での別れのときを迎えたのでした。

振り返ってみますと前住職は、戦況が悪化していく混沌とした昭和十八年に生を受け、厳しい環境の中を生き抜き、独自の視点から様々なことに挑み続けた生涯でした。今回の新型コロナウイルスの問題による時代の転換点にいのちを終えていったのも象徴的な感じがします。

喉頭ガンで声を失ってからは、病苦の現実を抱え、もがき苦しみながら

も非戦・平和への冒涇を繰り返す政治に対し、激しい嘆きと憤りの念を保ち続けた姿は、私に今でもいろいろな問いを投げかけてきます。

新型コロナウイルスの蔓延という形で世界中がこれまでの「あたりまえ」の生活を見直す「新時代」を迎えるとは、前住職も想像していなかったことでしょう。

しかし、新型コロナウイルス発生の問題は私たちが忘れていただけで、先人たちは幾度となく経験した「あたりまえ」の事態であると歴史を振り返って知ることになりました。

近くでは、約百年前にはアメリカから発生した新型インフルエンザ（スペイン風邪）によって全世界で約五億人が罹患し、五千万人以上が亡くなったといわれています。第一次世界大戦中に起きた事態に、戦争も早期に終結するということになりました。

早期の収束を願う最中ですが、スペイン風邪の場合は第二、第三波という流れがあり、収束に二年半ほどの時間を要しました。その後、日本では、関東大震災が起き、世界恐慌、日中



善興寺所蔵 棟方志功作『御二河白道之柵』

戦争から太平洋戦争へと苦難の道へと進んでいったのです。

今、ウイルスに対する恐れに伴い、不安が拡大している中、私たちは何を抛りどころとして生きていくのか、露わになってきています。

こんなとき宗祖親鸞聖人はどうおっしゃるでしょうか。八十八歳のころのお手紙に次のような言葉が残されています。

「何よりも、去年から今年にかけて、老若男女を問わず、多くの人が亡くなったことは、本当に悲しいことです。けれども、命のあるものは必ず死ぬという無常の道理は、すでに釈尊が詳しくお説きになつているので、驚かれるようなことではありません。わたし自身（親鸞）としては、どのような臨終を迎えようともその善し悪しは問題になりません。信心が定まった人は、阿弥陀如来の本願を疑う心がないので、必ず浄土に生まれる仲間の位に定まっているのです。だからこそ愚かで智慧のない私たちであっても尊

い臨終を迎えるのです。」（親鸞聖人ご消息 現代語訳）

と、どのような死を迎えるかという不安を超越した阿弥陀さまからの「確かさ」をいただかれています。安心感を門弟に伝えられています。

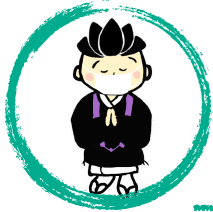
浄土の教えは、この世に絶対的な価値を置くのではなく、どのような形であれ、いのち終えていくことを自然のこととして受け止めることのできる力を与えてくださいます。

前住職は、常々「死ぬのは怖くない」と言っていました。その言葉の背景には、先に往き生まれられた先人たちからのお念仏に込められたメッセージを確かに聞いていたからだと思えます。

浄土とこの娑婆をつなぐ大いなる願いに抱かれながら、これから訪れる困難の時代を、前住職の眼差しを胸に生きていこうと思えます。

合掌

HAPPY ナムナム



まいどはや!!レン君だナモ。読経中のマスクがしんどい季節になってきたよ。こまめに水分摂って、熱中症には気をつけるんだナモ〜。
各ページ文字ばかりになって読みにくかったよね。もっと見やすく編集するよう、担当者に伝えておくんだナモ〜。

身近な仏教用語 邪魔 (じゃま)

私たちは日頃から何気なく「お邪魔します」や「邪魔な枝だな」というようにこの言葉を遣っていますが、直訳すると邪(よこしま)な魔物という意味で「悪魔」と言っても同じことです。原語はサンスクリット語の「マーラ」で、正しい行いをしようとする心を妨害する、自分の中のもう一つの心のこと。心の葛藤と言っても良いかもしれませんが、それだけではなく、人に迷惑をかけることも「邪魔」がもつ意味のひとつ。邪の偏は“牙”であり魔の中には“鬼”がいます。自分という存在が、自分にも他人にも、恐るべき牙や鬼になっていないかを点検してみましょう。



坊主の棚からひとつかみ



『ひまわり』 (1970年)

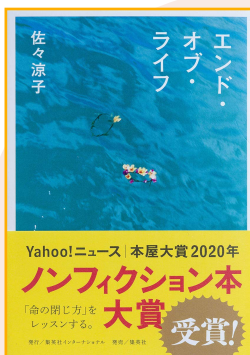
監督 ヴィットリオ・デ・シーカ

出演 ソフィア・ローレン、マルチェロ・マストロヤニ

物語の舞台は第二次大戦下のイタリア。戦争によって引き裂かれた夫婦の悲しき愛の行方を描いた作品。

あたり一面に広がる美しいひまわり畑と、その地に眠る多くの犠牲者。その対比が戦争の残酷さを際立たせます。印象的なひまわり畑が撮影されたのは旧ソビエト連邦、現在のウクライナ。ロシアの軍事侵攻に対する抵抗の象徴となっている“ひまわり”はウクライナの国花です。

中高生にもオススメ



「看取りのプロフェッショナル」である友人が患った病と、難病の母。

残された日々を共に過ごすことで見えてきた「理想の死の迎え方」とは。終末医療のあり方を考えさせられる一冊。

『エンド・オブ・ライフ』

佐々涼子 集英社インターナショナル、2020年



多くの高校生がスマホを手にしながらか「スマホを捨てたい」と言った。

変化していく人とのつながりに感じる漠然とした不安。テクノロジーの進化をどう受け入れ、どう豊かに生きるか。

『スマホを捨てたい子どもたち』

山極寿一 講談社選書メチエ、2020年

Instagram

Facebook

Twitter



各種SNSも逐次更新しておりますので、ぜひご覧ください。お問い合わせは、SNS内のDM、または info@ranshokai.jp 【鸞翔会公式アドレス】まで。

浄土真宗本願寺派高岡教区

鸞翔会